「国語教育研究」第五十八号（平成二十九年三月刊）

小学校国語教科書の編修様式の変遷

幾田伸司

一　はじめに

国語教科書は、学習者に提示される教材群のアンソロジーであるとともに、年間の授業計画を示したモデルカリキュラムであり、学習のために使用される教具でもある。そのため国語教科書は、学習の利便性を図るために、一般図書とは異なる特有の型をもって編修されている。たとえば、教科書全体は単元を単位として構造化されているし、単元設定や採録教材にも緩やかな基準が設けられている。個々の教材を掲載する際にも、新出漢字や重要語句を欄外に挙げたり、教材末に学習の手引きを付したりしている。こうした教科書の形式は、個々の教科書で様々な工夫が施される一方で、教科書を超えて共有されているものもある。教科書に設定されているこのような形式的な枠組を、本稿では教科書の編修様式と呼ぶこととする。教科書の編修様式は、その教科書が提供しようとするカリキュラムや学習の実際に合わせて設計されたものであり、大多数の教員が行う一般的な授業のあり方を方向付けてもいる。

このような編修様式は、先行する教科書の様式を踏襲、改善することによって形成されてきたものである。従来の国語教科書史研究は、主として教科書のアンソロジーの側面に注目し、採録された教材の変遷をたどることを通して、国語教科書が提示する教育内容や価値観の変容を考察してきた。一方で、教材がどのような形で学習者に渡されるのか、つまり教科書が担う教育内容の媒体という役割についての検討は、ほとんど手がつけられてこなかった。教育内容の媒体＝メディアとしての教科書のあり方がどのように形成されてきたかを考察し、現行の様式が形成されるまでの経緯をたどっておくことは、今後教科書がどのような形で編修されうるのかを見通していくための有益な情報となると考える。

そこで本稿では、戦後小学校国語教科書がどのような編修様式で作成されているかを調査し、現行様式に至るまでの史的変容を記述したい。教科書特有の編修様式は、特に小・中学校の教科書において顕著に見られる。そこで本稿では、小学校教科書を対象として検討することとする。

二　調査対象

本稿では、モデルとして、学校図書が刊行してきた小学校検定教科書を取り上げる。同社は検定最初期の昭和二四年度から現行までの七〇年以上にわたり継続して教科書を刊行しており、通時的に教科書の変遷を検討するのに適した素材である。

調査対象とした教科書の一覧は、次の通りである。

	教科書名	刊行年
A	国語　五年生	S26
B	五年生の国語	S27
C	小学校国語	S30
D	わたしたちの国語	S34
E	小学校国語	S36
F	小学校国語	S46
G	小学校国語	S55
H	小学校国語	H4
I	みんなとまなぶ　小学校国語	H14
J	みんなとまなぶ　小学校国語	H23

戦後の検定国語教科書は昭和二四年度から刊行されたが、当初は検定に合格した学年から順次刊行されたため、全学年がそろうのは昭和二六年度からである。そこで、本稿でも昭和二六年度から使用された『国語　五年生』を最初期の教科書とし、以後、学習指導要領の改訂にあわせて作成された大改訂時の教科書を取り上げた。なお、昭和三五年度までは一社から複数の教科書が刊行されており、改訂年度も随時であったため、教科書の内容に即して対象教科書を決定している。また、高学年の方が教科書の様式が定まっていることを考慮し、五年生用を取り上げることとした。

これらの教科書の五年生上巻に採録された教材の一覧を、稿末に資料として掲載した。教材に付したジャンル名や言語活動は教科書記載のものを用い、適宜筆者が補足した。以下における教科書の記載については、刊行年をもとにS26版のように記述する。

三　小学校国語教科書の教科書編修様式の特徴

考察の観点とするために、現行教科書と一般図書とを比べて特徴的であるとみられる教科書編修様式の特徴を挙げる。

①　単元を単位として構造化されている。

②　単元・教材等の選定と配列について

A　単元として設定される言語活動の領域や教材のジャンルは、ある程度定まっている。

B　単元の主教材の後や単元間に、関連教材や、書くこと、話すこと・聞くことを取り立てて行う練習教材がおかれている。

C　単元とは別に、言語事項を取り上げたコラムや練習教材がお

かれている。

D　第一単元の前に、たとえば巻頭詩のような授業開きのための教材がおかれている。

E　巻末に資料（付録）が掲載されている。

③　教材の構成について

A　物語や説明文などの教材では、本文の欄外に新出漢字や重要語句が示されている。

B　読むことの単元では、教材の後に学習の手引きが設定されている。学習の手引きは、読解の観点のほか、学習活動も指示されている。

C　話すこと・聞くこと、書くことの単元では、学習活動の手順が指示されている。また、モデルとなる事例が示され、参照できるようになっている。

四　単元を単位とする構造化

戦後の国語教科書は、個々の教材を並列するのではなく、複数の教材を関連づけて一課に集めた単元を単位として、教科書全体を構造化している。五年生上巻の場合、設定されている単元数は五～八で、年代による顕著な差は見られない。

昭和二〇年代の教科書は、テーマに沿って二～四編の教材を括り一単元とする編修様式を採っている。たとえば、S26版で設定された単元には、「新しい力」「心と心」のように教材内容の共通点を示したもの、「スポーツ」「少年のころ」のように素材や題材を示したもの、「発表会」のように設定された言語活動を示したものなどが見られ、各単元ではテーマに沿って各教材の学習をつないでいく授業展開が想定されている。この年代の教科書はテーマに沿って単元内の教材が編成されているので、教材のジャンルや言語活動の領域を系統立てるという意識はあまり見られない。学習指導要領に規定された学習内容は一覧表を作成して教材ごとに対応を設定し、教科書全体で年間の学習内容を担保するという形をとっていた。したがって、現行教科書のように、各学年で同じ時期に同ジャンルの学習を設定する反復型のカリキュラム構成にはなっていない。

昭和三〇年代の教科書でも、複数の教材を合わせて単元を構成する様式は踏襲されている。ただしS36版では、「げき」のようにジャンル名を出したり、「最後の授業」のように教材名を出したりして、一教材だけで単元を構成する様式も見られ始める。

教科書における単元の位置づけが大きく変わったのはS46版からである。この版から、単元名は設定せず、原則として一単元に主教材を一つおく教材中心の単元編成が採用された。また、この版からは、学年が変わっても同じ時期に同じ言語活動領域の学習を行う反復型のカリキュラム構成となった。複数の教材をテーマで括り、言語活動の経験を通して学習内容の習得を図る学習から、教材を媒材として学習内容を系統的に組織する学習に切り替えられたと言えるだろう。同時に、単元とは別に、書くことや話すことについて取り立てた練習教材が登場した。S46版では読むことの教材の後に「作文の練習」が置かれた単元が三単元あり、読むことの学習を書くことへつなげる関連学習が、教科書の上で設定された。

Ｓ55版以降の教科書も、Ｓ46版を踏まえて、各単元に主教材を配置する編修様式を採用している。ただし、主教材と関連させた副教材をおくだけでなく、単元番号が付された主教材から独立して学習を行う練習教材も、近年になるほど増えている。

五　単元・教材等の選定と配列

昭和二〇年代の教科書では、学習者と同年代の子どもが登場し、案内役の役目を担っている。単元はその子どもの生活や季節、年中行事などと関連づけて配列され、一年の中でその子が経験する出来事に沿って単元が進行する構成になっているのである。たとえば「心と心」（Ｓ26版）は、登場人物のまさおが、転任した先生や転校した友だちと手紙のやりとりをしている設定で単元が構成されている。この単元では、それぞれが自分の住んでいる町や今の生活を、説明文、研究報告、日記（この日記には俳句や短歌も書かれている）などで書いた手紙が教材として提示され、手紙のやりとりというまさおの生活で起きた出来事に沿って、種々の文種の文章を読んだり書いたりする学習活動が設定されるのである。

昭和三〇年代の教科書は、複数教材で一単元を構成する様式を踏襲する一方で、学習活動を軸にした単元が増加する。たとえばＳ36版に設定された八単元中、テーマで括った単元は「春の詩」「南から北から」の二単元であるのに対して、学習者の学習活動で括った単元は「作文」「知識を求める」「話し聞く生活」「感想をまとめる」の四単元あり、全体の半数に及ぶ。また、Ｓ34版には課外読み物として「残雪」が掲載された。「読書会」など、読むことの学習として読書活動を設定した単元はこれ以前にもあったが、学習の手引きがつかない読書材が見られ始めるのはこの時期からである。

一つの単元に主教材をおく新しい編修様式を採用した教科書であるＳ46版では、一つの単元で主として行う言語活動も原則的に一領域にしぼって学習を進める形になった。主教材で扱うジャンル・言語活動は、物語、説明文、書く、話す（話し合う）となっている。また、この版では、読書材「レナド」と図書紹介「読書のために」が掲載された。言語能力の習得を図る単元の学習とは別に、読書指導を行う教材・単元が設定され、こうした読書教材（単元）は以降の教科書に引き継がれていった。

Ｓ55版以降の教科書はすべて、Ｓ46版のように一教材で一単元を構成する編修様式を採っているが、主教材の後におかれる練習教材の重みは近年に近づくほど増し、単元間におかれた独立教材として扱われるようになってきている。たとえばＨ14版の「クラスイベントの計画を立てよう」では、主教材の活動と関連づけられた「お礼状を書こう」の後に「経験をふり返ろう」という教材がおかれている。「経験をふり返ろう」は生活作文を書く活動であり、クラスイベントの計画を立てる話し合いとは異なる、独立した設定の学習内容である。ある程度の時数を費やす単元を柱にしながら、短い時数で実施する取り立て学習も組み合わせて、年間のカリキュラムを構成しているのである。読書単元についても、「ブック・ファイルを作ろう」（Ｈ14版）のように、単なる読書材と図書紹介を提示するだけでなく、言語活動と組み合わせて学習を展開する単元構成に

なっている。

近年の教科書で培うことが求められる言語能力は多岐にわたるし、教科書には言語活動を取り入れた教材も求められている。近年の教科書は、個々の教材で展開される活動を通して習得した言語能力を、単元として設定された大きな活動の中で活用していくような授業展開を想定して、編修されるようになっている。

六　言語事項教材

漢字や文法などの言語事項は国語科の重要な学習内容である。近年の教科書では、言語事項を取り立てて指導するコラム教材がおかれているが、言語事項教材が取り立て型となったのはS46版以降のことである。

昭和二〇年代の教科書では、言語事項についての学習は単元の中に埋め込まれている。たとえばS26版では、伝記の単元である「少年のころ」の学習の手引きに語彙や文法事項の問題が付され、学習するようになっている。

昭和三〇年代の教科書では、言語事項は取り出されて一つの単元として扱われるようになった。S30、S34版で設定されている「ことばの研究室」では、「ことばのおこり」（S30版）、「文字の歴史」（S34版）のように、説明文の学習とからめて言語事項についても学ぶ形になっている。また、「辞書の引き方」（S34版）のように、特定の知識を取り立てて扱う教材も見られる。昭和三〇年代は、言語事項を単元として集中的に扱った時期だと言えるだろう。

S46版からは言語事項の単元がなくなり、「ことばのきまり」のように知識を提供するコラム教材が、単元の間に分散して挿入されるようになる。S55版ではさらに「漢字の練習」が、H4版では語彙に関するコラム教材である「言葉のいずみ」がおかれ、単元の主たる学習内容とは別に言語事項を取り立てて提示する編修様式が確立する。これらの教材では練習問題なども取り入れられ、知識として言語事項を学ぶシステムが拡充され、現行まで踏襲されている。

また、漢字や語彙について、各教材の中で取り立てて示す様式も普及した。S34版では、新出漢字が物語や説明文教材の上部欄外に示され、新出漢字を学習者がすぐに把握できる形式になった。このように教材の提示様式にも学習の便宜を図るための工夫が加えられるようになり、現行まで継続して採用されている。

七　授業開き教材と巻末資料

国語教科書では、冒頭に年度の授業開きのための教材が配置され、巻末には付録として資料が掲載されている。多くの教科書が採用するこの編修様式について、形成過程をたどっておきたい。

学校図書の場合、昭和二〇年代からほとんどの教科書で、授業開き教材の位置に詩教材がおかれてきた。昭和三〇年代までは、第一単元の第一教材に詩を配置しており、音読などの活動を展開しやすい詩を授業開きに用い、春というテーマで関連させた随想的な文章の読みに展開していくという単元構成が取られている。

S46版では、詩は第一単元から切り離されて巻頭に置かれるよう

になり、第一単元は物語教材の学習になった。詩を授業開きにおくことは継承しているが、「物語を読む」ことでまとまった単元を展開するために、詩教材の位置づけが軽くなったと言えるだろう。ただし、H14版では第一単元に詩教材が組み込まれ、二編の詩の後に物語教材をおいて第一単元が構成されている。複数の文学教材による単元構成はこの時期では異例であるが、教材構成から見て実質的には巻頭詩が第一単元に組み込まれたと考えられるだろう。なお、H23版では、従前の巻頭詩と物語という構成に戻されている。

H14版では、授業開きとして「二人で話そう」という、教室内コミュニケーションを行う話すこと・聞くことの活動が取り入れられた。これは、伝え合うことや教室内の関係の基礎作りが重視されたことの表れと捉えられる。前述のように、この版では巻頭詩が第一単元に組み込まれていた。授業開き教材に教室内コミュニケーションの題材を入れた結果として、巻頭詩が第一単元に送りこまれたと考えられよう。話すこと・聞くことを第一単元の前に置く構成は次の版でも踏襲され、H23版でも学級作りという小見出しで「つなげてトーク」という活動が設定されている。教室内の関係作りを学年の授業開きで行い、詩教材の音読を経て物語の学習につなげていく授業展開が、近年の教科書の様式として定着しつつある。

巻末資料を置く様式は、検定最初期の昭和二〇年代から採用されている。巻末資料では、新出漢字や学年配当漢字の一覧が一貫して掲載されており、漢字以外では、「おもなことば」（S26版）「注意することば」（S36版）など語彙が示されている版もある。基本的に自学や復習のために使う索引としての機能が与えられていて、授業で活用する資料集の役割は持たせていない。また、昭和二〇年代では教師や保護者にあてて教科書の内容や編修方針、学習内容を提示することもあった。巻末資料の役割が変わるのは、H14版からである。この版で設定された「使ってみよう」には、「情景」や「要旨」といった授業で用いる学習用語がまとめられた。単なる索引から、必要に応じて授業中に参照すべき学習資料としての機能も持たせるようになったのである。さらにH23版では、学習用語の他に、読書材として「父ちゃんの凧」が掲載された。本編内に読書単元として「注文の多い料理店」はあるが、それとは別に読書材を提示することも、巻末資料の新たな役割となってきている。

八　読むことの教材のジャンルと作者名の記載

周知のことではあるが、読むことの教材は物語と説明文が主となっている。詩教材は巻頭か単元間におかれ、単元として設定されることはほとんどないようである。他には伝記やノンフィクション、古文などが採られることもあるが、採録教材のジャンルは学習指導要領によって規定されている。

ところで、現行の編修様式において、教材に作者名を付すのは当然のこととなっている。ところが、戦後の小学校教科書では、当初から教材と作者名がセットで示されていたわけではなく、昭和二〇年代の教科書では作者名は明記されていない。これは、当時は既存のテキストから採録された教材が少なかったことも一因であろう。ただし、指導書には作者名が示されている場合もあるので、必ずし

も作者不詳であることのみが原因ではないと思われる。少なくとも、学習者に提示する情報として作者名が重視されていなかったとは言えるだろう。昭和三〇年代以降になると教科書でも作者名を示すようになるが、S30、S36、S46版では学習の手引きの後に付記の形で、S34版では巻末に一覧で示す形をとっている。いずれも目次には作品名だけが掲げられ、作者名は示されていない。S55版ではじめて目次に作者名が示されたが、本編では作者名は教材本文の最後におかれている。現行のように目次で教材名と作者名を示し、本編でも作品冒頭に併記して示すようになったのは、平成に入ってからのことである。作者名の記載の仕方は便宜上の問題かもしれないが、授業における「作者」という情報が持つ価値の捉え方を反映しているとも考えられる。他社や他校種の教科書と比較して検討する必要があるだろう。

九　書くこと、話すこと・聞くことの単元構成

テーマに沿って単元の教材が編成されていた昭和二〇年代の教科書では、書くこと、話すこと・聞くことといった言語活動領域の学習は単元内の教材に即して行われていた。たとえばS26版「心と心」では、教材として提示されている様々な文体で書かれた手紙を読み取り、その形式で手紙を書くという学習活動が設定されている。教材を手本として、教材に倣って書く活動を行う学習の構成である。また、「学級新聞」（S30版）のように、学習活動をテーマにして教材が編成された単元もある。「学級新聞」の場合、登場人物であるまこと君が学級新聞を作ることになったという設定で単元が構成されている。各教材では、まず「編集会議」でまこと君のクラスで新聞の構成や内容を決めていく過程を物語風に述べ、「なかよし新聞」で作成した新聞を例示し、さらにふり返りの話し合いの要点を記録した「ひひょう会記録」で「なかよし新聞」の修正点を挙げている。新聞作りの要点を教材で提示し、それに沿って実際に新聞作りをやってみるという手順になっているのである。このように教科書の教材は、制作物を作成するための手順や見本、留意点を示すためのモデルの役目を与えられている。

教材にモデルの役目を担わせる単元構成は、昭和三〇年代以降も踏襲された。「作文」（S36版）では、提示された作文を分析し、その要点を踏まえて各自が作文をする授業展開が示されている。「作文」では、生活文「おかあさんの顔の色」、観察記録「月下美人の花」、報告文の書き方の解説「ねらいをはっきりと」という異なる文種のモデルを提示し、それを踏まえて各自が作文を行うのである。また、この単元では、学習者自身が教材について話しあい、留意点を見つけていく活動も取り入れられている。

S46版の「なくなった保険証」「まん画をどう思うか」も単元構成は踏襲されており、作文例や話し合い記録をモデルとして提示し、モデル教材を素材にして作文や話し合いの留意点を話し合った後で、実際の表現活動を行うという学習展開が設定されている。ただし、S46版は主教材を中心にした単元になっているので、主教材の後に解説文が付けられ、分析した留意点を個々の表現に生かしやすいようになっている。このように、書くことや話しあいの単元で

は、モデル教材の分析から表現活動に展開する様式が定着していた。ただし、単元で実施する作文や話し合いの具体的な題材は、学習の手引きで例示するにとどめている。

これらの領域の単元構成が変わるのはH4版からである。H4版の「心に残るできごと」は、モデルとなる作文を示して分析するのではなく、題材選び→主題の設定→取材→構成→書き出し→本文→まとめ→題名という作文の過程を順を追って示し、学習者がその過程に沿って実践していく教材の構成になっている。メモや文章の例も示されているが、留意点を分析するための素材としてではなく、それぞれの手順で作成するメモや文章の見本として提示されている。活動や思考の具体を順を追って提示する編集様式に変わったのである。「学級新聞」のように活動内容を提示する単元は以前にも見られたが、学習者が行う活動を具体的に示す単元構成が採られたのは平成になってからである。何を作るのかではなく、学習者が表現できるようになるための思考と活動の過程が、学習内容として設定されるようになったといえるだろう。

さらにH14版では「クラスのイベント計画を立てよう」「方言を調べて報告しよう」など、扱う題材も具体的に示すようになっている。活動型の学習が定着していく中で、近年の教科書は、教科書の中で学習を完結できるように配慮されている。

十　おわりに

冒頭で述べたように、教科書の編修様式は学習のあり方を方向付けるものである。ある編集様式が採用されたのであれば、それはその時代に求められた学習形態を反映していたり、学習者にとって使いやすいと判断されたりしたからである。しかし、たとえば言語事項教材を例にすると、コラムという編修様式が文法に対する体系的な学習を可能にした一方で、具体的な文章と切り離された暗記型の学習を呼び寄せてしまったことは想像に難くない。それぞれの編修様式は功罪を併せ持っていて、時代の要請にあわせて修正、改変していくべきものである。

本稿での検討からは、昭和四〇年代以降、教科書の編修様式に大きな転換があることが指摘できた、この時期に提案された編修様式が原型となって、現行様式につながってきているのである。とはいえ、本稿の記述は、一部の教科書を例にした一面的なものにすぎない。他社や他学年、小改定時の教科書と照らして、本稿の事例を検証することが今後必要となる。

本稿は教科書様式の変遷記述にとどまっており、そのような様式が採用された要因については検討できていない。先行様式を踏襲するにせよ改変するにせよ、そこには必然性を伴った要請があるはずである。新たな編修様式が採用される要因としては、まず学習指導要領が挙げられるが、他にも、学習スタイルや学習者像、教科書に対する期待などもあるだろうし、社会制度や印刷技術などの影響も考えられる。教科書を取り巻いている情況は、教材採録だけでなく本稿で取り上げたような編修様式にも影響を持っている。その検討を進めることも、今後の課題である。

（鳴門教育大学）

【資料　学校図書　小学校五年生用教科書　上巻　掲載教材一覧】

【資料　学校図書　小学校五年生用教科書　上巻　掲載教材一覧】

	A『国語　五年生』S26	B『五年生の国語』S27	C『小学校国語』S30	D『わたしたちの国語』S34	E『小学校国語』S36
1	新しい力	春	春のスケッチ	春	春の詩
	大地（詩）	どこかで春が（詩）	詩の手帳から（詩）	春のスケッチ（詩）	花ふぶき（詩）
	春のさきがけ（叙景文）	春の朝（写生文）	こぶしの花（写生文）	こぶしの花（写生文）	春のスケッチ（詩）
	新しい力（抒情文）	北海道から	早春の海べ（写生文）	早春の海べ（写生文）	Doko ka de Haru ga
			奈良の春（手紙）	奈良の春（手紙）	
2	心と心	大きな愛情	美しい心	美しい心	作文
	先生へ（手紙）	自然のめぐみ（伝記）	おかあさん（生活文）	線路の友情（物語）	おかあさんの顔の色（生活文）
	わたくしの住む町（手紙／記録）	一頭のやぎ（事実物語）	勝利をすてて（物語）	やわらかなボール（物語）	月下美人の花（観察記録）
	小さな研究報告（手紙／報告）	アルベルト=シュワイツェル（伝記）	線路の友情（物語）	悲願の橋（物語）	ねらいをはっきりと
	日記のたより（手紙／日記）				Hyogo
3	スポーツ	みつばちとともに（日記／紀行）	ことばの研究室	ことばの研究室	知識を求める
	ドッジボール大会	白うめの林	ことばのおこり（説明文）	話すことと書くこと（説明文）	辞典のひきかた
	かがやかしい記録（伝記）	千葉のれんげ	話すことと書くこと（説明文）	文字の歴史（説明文）	本で調べる
		菜の花畑		辞書のひきかた	
		みかんのかおり			
		たざわ湖のほとり			
		はぎの花を求めて			
		かりかちとうげから			
4	発表会	大空をあおいで	科学の世界	海	話し聞く生活
	夏休みがすんで	七つの星（説明文）	蚕の観察（記録文）	海の歌（よびかけ）	対話と話しあい
	クラーモント号のできるまで（伝記）	雲のさまざま（説明文）	空はどこまで（詩／説明文）	造船所（詩／記録文）	たんぽぽのない村
	時（劇脚本）	空はどこまで（説明文）	科学者の道（伝記）	かつおつり（生活文）	
	蚕のまゆ（観察記録）				
			夏休みのしごと		
			よびかけの研究（説明文／呼びかけ脚本）		
5	少年のころ	海はよぶ	学級新聞	新聞	最後の授業（物語）
	小さな画家（伝記）	海の歌（音読脚本）	編集会議（生活文）	なかよし新聞	
	少年ニュートン（伝記）	ほげいの話	なかよし新聞（ニュース版）	ひひょう会記録（記録文）	
			なかよし新聞（学習版）	新聞の読み方（説明文）	
			ひひょう会記録（記録文）		
6		本を読もう			げき
		読書について			てるぼうず　ふるぼうず（劇脚本）
		ボールをみつめて			
		月光の曲（伝記）			
7					南から北から
					関門トンネル（記録文）
					立山に登る（記録文）
					Matusima
					横浜港の朝（詩）
8					感想をまとめる
					海の勇者（物語）
					残雪（物語）
				課外読み物	
				残雪（物語）	
資料	お仕事の手引	新しく出た漢字	新しい漢字	新しい漢字	新しく出た漢字
	新しく出た言葉	これまでに出た漢字	よみかえ	よみかえ	よみかえ
	漢字	*先生と父兄へ*	四年までに出た漢字	音訓別教育漢字さくいん	ローマ字五十音表
	国語五年生上の編修について		*先生と家族のかたがたへ（内容一覧表）*	文の作者	音別　教育漢字さくいん
			国語能力表との対照	*内容一覧表*	注意することば
				この本の語法指導系統	
				表記のきまり	

	F『小学校国語』S46	G『小学校国語』S55	H『小学校国語』H4	I『みんなと学ぶ小学国語』H14	J『みんなと学ぶ小学国語』H23
	水あゆのうた（詩）	どうしていつも（詩）	レモン（詩）	二人で話そう（話す・聞く）	はじめて小鳥が飛んだとき（詩）
					学級作り　つなげてトーク
1	夏みかん（物語）	悲願の橋（物語）	わすれ物（物語）	水のこころ（詩）	トゥーチカと飴（物語）
	ことばのきまり　①	◇文語の文章	◇しょうかいします（話す）	あいたくて（詩）	言葉のきまり１
		★ことばのきまり①		チョコレートのおみやげ（物語）	
				言葉のいずみ①	
2	なくなった保険証	漢字の話（言語事項）	魚の感覚（説明文）	クラスのイベント計画を立てよう（話す・聞く）	和紙の心（説明文）
	なくなった保険証（作文）	◇漢和辞典のひきかた	言葉のきまり１	お礼状を書こう（書く）	言葉のいずみ１
	作文の組み立て	◇漢字の練習	友達発見（話す）	言葉のきまり①	漢字の部屋　①
				経験をふり返ろう（書く）	○書くこと　一筋道（論理）をたしかめる
3	八郎	自然に目を向けて（書く）	心に残るできごと（書く）	日本の恐竜時代（説明文）	学校を百倍すてきにする方法（話す・聞く）
	作文の練習	もぐら（作文）	言葉のいずみ①	いろいろな方法で調べよう（調べる）	言葉のきまり２
	ことばのきまり　②	よく観察し、適切なことばで書こう（書く）		言葉のいずみ②	○書くこと　一表やグラフを使って伝えよう
4	まん画をどう思うか（話し合い記録）	一万一千メートルの深海へ（事実物語）	木竜うるし（劇脚本）	レイチェル・カーソン（伝記）	分かったことを報告しよう（書く）
		★ことばのきまり②		ブック・ファイルを作ろう（読書）	漢字の部屋　②
				読もう・楽しもう（読書）	
			山頂から（詩）	星とたんぽぽ（詩）	
			故郷の空（詩）	きもち（詩）	
			言葉のきまり②		
5	ニッポニアーニッポン（説明文）	木竜うるし（劇脚本）	漢字の話	方言を調べて報告しよう（書く）	注文の多い料理店（物語）
	作文の練習	◇脚本の朗読		言葉のきまり②	言葉のおもしろさから読んでみよう
	ことばのきまり　③	◇手紙を書く（書く）			漢字の部屋　③
	レナド（物語）				手紙（詩）
	読書のために				まり（詩）
					言葉の文化に親しもう（古文）
6	知識を求めて	知識を求めて（読む／書く）	平和への祈り（伝記）		わたし風「枕草子」（書く）
	たなばたのおこり	七夕のおこり	夏休みの読書		言葉のいずみ２
	魚の感覚（説明文）	必要なことを整理して（書く）	見学の記録をまとめよう（書く）		
	ことばのきまり　④	色に関係のあることば			
		★ことばのきまり③			
		◇メモをもとに話す			
	青い色（詩）				
7	詩のノート	豊かな読書	レナド（物語）		
	海・ガリレイ・耕うん機・迷い（児童詩）	本とのめぐりあい	言葉のいずみ②		
		大造じいさんとがん（物語）			
8	玉虫のずしの物語		空気の重さを計るには（説明文）		
	作文の練習				
資料	新しく出た漢字	◇漢字の練習	新しく出た漢字	新しく出た漢字	父ちゃんの凧（物語）
	漢字の練習	◇ことばの練習	四年までに学習した漢字	使ってみよう（学習用語）	インターネットを活用して情報をさがそう
		◇新しく出た漢字		主な部首の名前	授業で使う言葉（学習用語）
		◇四年までに習った漢字			話し方・聞き方・まとめ方
					漢字のまとめ